

Title	源国信『源中納言懐旧百首』に見える『源氏物語』撰取：「源氏和歌集」参照の可能性
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	語文. 2017, 109, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73305
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

源国信 『源中納言懷旧百首』 に見える 『源氏物語』 摂取

——「源氏和歌集」参照の可能性——

瓦 井 裕 子

一、源国信と『源中納言懷旧百首』

嘉承二年(一一〇七)の堀河院崩御は、近臣たち、また堀河院の文雅によって熱していた歌壇に大きな衝撃を与えた。近臣たちの嘆きは異常とも言える高まりを見せる。『中右記』には近臣たちの夢に度々堀河院があらわれて温かい言葉をかけたことが記され、『台記』には源定国なる人物が天皇の転生した西海に渡海したという噂が記される。これはやがて説話となって『発心集』に入¹⁾った。文学面においても「追慕の文学」とも言うべき『讃岐典侍日記』や『永久百首』といった作品が生み出されていったが、そうした動きの嚆矢となったのが『源中納言懷旧百首』(以下、『懷旧百首』)と呼ばれる百首歌である。

『懷旧百首』は、源国信によって詠まれた百首歌で、成立は堀河院崩御の翌年嘉承三年(一一〇八)秋頃と推定されている³⁾。国信は、右大臣源頭房の四男、延久元年(一一〇六)の生。姉に白

河天皇中宮賢子がおおり、甥・堀河院の第一の近臣として活躍する。文雅の帝王として名高い堀河院の歌壇においても領導的役割を果たした。中世歌合への画期とされる源宰相中将家歌合を主催し、『堀河院艶書合』『堀河百首』など主要な和歌行事でも中心的存在であった。堀河院が若くして崩御したときには、その臨終に立ち合い、近臣としても親族としても悲嘆に沈んだ。

『懷旧百首』の内容は、橋本不美男氏が「堀河院を恋ひつめた詠嘆が百首にほとばしり出た」哀傷の百首とされ、浅田徹氏はさらに詳細に分析して、無常や罪業の恐れなど堀河院とは直接関係のない歌が二割近くあることから、「堀河院に手向けた」作品ではなく、堀河院崩御後の国信自身の内心を見つめた作品であると位置づけられた。歌題は『堀河百首』に大枠を抛りながら、適宜追加・削除しており、哀傷にふさわしい歌題構成にしようという意図が看取される。

現在、冷泉家時雨亭文庫本と宮内庁書陵部本が伝わっており、

冷泉家本が書陵部本の親本であると考えられている。⁽⁵⁾冷泉家本奥書には、

已上源中納言後於堀河院恋昔之百首也

僕範草之⁽⁶⁾

と見え、堀河院の崩御後、堀河院において詠んだことが記される。

『懐旧百首』の性格は以上によって明らかにされつつある。一方で、具体的な表現にまで立ち入った研究は未だ行われていない。和歌は短期間のうちに一気に詠まれたのか、その表現は練られておらず、類似表現が多く単調に偏りがちである。加えて、先行歌撰取が甚だしい。一見文学的価値は高くないようではあるが、堀河院歌壇の主要歌人の事跡として、またやがて『永久百首』に繋がる崩御後の歌壇の動向を示すものとしても注目される。さらに先行歌——主に『堀河百首』と『源氏物語』——の原態をあらかじめ留めているため、その撰取の様相がかなり鮮明に窺えるという点で興味深い作品である。

本稿では、『懐旧百首』における『堀河百首』と『源氏物語』の影響を指摘し、これらを用いてどのように詠歌しているかを、参照の形態という観点から紐解いていくことで、最終的に国信が『源氏和歌集』のような和歌抜書を参照していた可能性に言及したい。

二、『堀河百首』の撰取と参照形態の推測

まず、『懐旧百首』における『堀河百首』の撰取とその参照形

態から述べていきたい。『懐旧百首』は題を『堀河百首』に拠るばかりでなく、和歌表現自体にも『堀河百首』の影響が顕著である。本百首を詠む際、『堀河百首』の同題から表現を取った例が散見される。

別れにし人もきてみぬ藤ばかりま何ふるさとに、□ふなるらん⁽⁷⁾

(源中納言懐旧百首) 蘭・42)

秋ごとにたれきてみよと藤ばかりま衣笠岳にはふなるらん⁽⁸⁾

(堀河百首) 蘭・665・師時)

はかなさはあきしもまたじ物ゆゑに何苗代に種をまくらむ

(源中納言懐旧百首) 苗代・14)

白露のおくて蒔くてふ小山田に何苗代をいそぐなるらん

(堀河百首) 苗代・236・永縁)

共に『堀河百首』の同題詠との共通表現が見られる。表現自体は独創的なものではないが、本百首が『堀河百首』参加者が堀河題で詠んだものであることを考慮するとき、このような表現の共通性は、『堀河百首』の影響を受けて起こったと考えるべきであろう。

このように、『懐旧百首』は『堀河百首』の題のみを踏襲するのではなく、表現においても『堀河百首』からの影響を受けている。かつて堀河院に献上した『堀河百首』の題という枠組みの中で、その表現を継承しながら、本百首ではそれを哀傷の文脈に詠みかえていこうとする。『堀河百首』を用いることによって往時を忍

び、堀河院亡き今と対照させようという国信の試みが看取されよう。

このような『堀河百首』の表現を用いながら詠歌するという『懐旧百首』の特徴を考えると、目を引くのは以下のような現象である。

卯の花をみればわが身ぞあはれなるおどろのかみのしろむと
思へば
〔源中納言懐旧百首〕卯花・21

今日くればしどろに見ゆる山がつのおどろのかみも葵かけけり
〔堀河百首〕葵・360・俊頼

第四句「おどろのかみ」は和歌ではほとんど例のない珍しいことばであり、『堀河百首』からの影響が想定される。しかし、これは同題詠ではなく、『懐旧百首』は卯花題であるのに対し、『堀河百首』は葵題となっている。卯花題と葵題は、『懐旧百首』・『堀河百首』共に隣り合う歌題である。

国信はどのように『堀河百首』葵題から『懐旧百首』卯花題の表現を撰取したのであろうか。彼は『堀河百首』の参加者で、時に主催者とも目される人物であるから、『堀河百首』の表現をよく承知はしていたであろう。しかし、一六〇〇首、異本歌を含めるとさらに多くなる『堀河百首』を踏まえて新たに百首歌を詠歌しようとするとき、記憶だけを頼りにしたとは考えにくい。まして、同題ではなく次の題からも和歌表現を撰取するこのような在り様は、書物による参照を想定したほうが自然である。おそらく書物としての『堀河百首』を見て卯花題を参照したとき、卯花題

に続く葵題も目に入り、「おどろのかみ」ということばから白い卯花と白髪^{（1）}の連想を思いついて、結果として卯花題に「おどろのかみ」が取り入れられたのではなかったか。同題詠ばかりでなく、次の題の表現をも取り入れるこの例からは、国信が文字化された『堀河百首』を参照したことが窺える。

水題でも同様の現象が起こる。

みちのへに踏むたへがたに薄氷われて世にふるわれぞ悲しき

〔源中納言懐旧百首〕氷・62

水鳥のすだく汀の薄氷われても鳩のかづくかな

〔堀河百首〕水鳥・国信・1011

「薄氷われて」という表現が、『懐旧百首』水題と『堀河百首』水鳥題に共通して用いられる。水題・水鳥題は、『懐旧百首』・『堀河百首』ともに、この順で隣接する歌題である。『懐旧百首』水題にこの表現があるのも、やはり『堀河百首』水題を参照した際、次の水鳥題の中に水題へそのまま転用できる「薄氷われても」という表現を見出して、『懐旧百首』水題に表現を取り込んでいったと推察される。

同題だけでなく次の題からもまた表現を撰取する在り様からは、国信の参照したのが一覽性を備えた文字資料、つまり書物としての『堀河百首』であったことが想定されるのである。

三、『源氏物語』の撰取

以上で『懐旧百首』における『堀河百首』の撰取とその参照形

態について述べてきた。以下では、参照形態という観点に基づき、『懐旧百首』における『源氏物語』撰取の在り様を探っていきたい。本節では、まず『源氏物語』撰取の事例を確認しておく。

例えば、おもふこと題の内の一首は次のように詠まれている。

涙のみみくれふたがりてあらぬよの闇にまどふぞ悲しかりける

〔源中納言懐旧百首〕おもふこと・101〕

この歌は、次の『源氏物語』椎本巻の歌を引く。

涙のみ霧りふたがれる山里はまがきにしかぞもろ声になく

〔源氏物語〕椎本巻

これは、宇治八の宮亡き後、匂宮からの弔問に大君が返した歌であった。本来は中君が返歌をすべきところ、悲しみのあまり筆をとることができない妹に代わって大君が詠んだものである。国信はこの歌を引くことで、父親を亡くして途方にくれる宇治の姉妹の悲痛を、君主を亡くして悲嘆にくれる自身の心情に重ね合わせようとしたと思われる。

次も、『源氏物語』の哀傷に沈む源氏の歌を引く。

いつまでのたくはへすとか山がつの命も知らず早苗とららむ

〔源中納言懐旧百首〕早苗・25〕

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん

〔源氏物語〕幻巻

紫上追悼の一年を描く幻巻の末尾付近の歌である。無常を痛感する源氏は、間近に迫った新年までも命があるか分からないと詠む。国信はその表現を取り、寿命という観点を持たずに目の前の農作

業のみ追われる山がつの姿に詠みかえた。

神楽題では手習巻の贈答を引く。

官人はありしながらに遊べどもむかしのことの音ぞ泣かれける

〔源中納言懐旧百首〕神楽・65〕

忘れぬむかしのことも笛竹のつらきふしにも音ぞ泣かれける

笛の音にむかしのこともしのばれてかへりしほども袖ぞぬれにし

〔源氏物語〕手習巻

小野尼君と娘婿の少将が、笛の音にも亡き妻、娘を思い出す。「むかしのこと」には「事」と「琴」がかけられるが、その中でも昔を思い出すよすがとなるのが笛であった。笛といえは、管弦を得意とした堀河院が特に愛した楽器で、笛の名手であったことはよく知られている。国信は、神楽題にあたり音楽に着目したとき、堀河院の笛を連想し、『源氏物語』の笛の音によって生前を想起するこの贈答に辿りついたのではなかったか。

以上のように、『懐旧百首』は『源氏物語』の、しかも主として哀傷歌から積極的な表現を取ろうとする。『堀河百首』から表現を取るの、まだしも容易である。『堀河百首』を開き、同題の歌を見れば事足りるし、時に隣接する題から表現を借りることもできる。しかし、『源氏物語』に関して、どの巻にどのような出来事が描かれ、そこでどのような歌が詠まれたかが臆げにせよ頭に入っていなければ、撰取以前に、どこから撰取するかを決定することさえ困難である。

見てきたように、本百首において国信はかなり自在に『源氏物語

語』を撰取している。堀河院の愛した笛を手がかりに撰取する場面を選ぶこともあれば、題とは直接の関係を持たない場面の状況を取りこんで詠歌することもある。また、哀傷歌の特徴的な表現を文脈に関係なく取り入れることもある。国信がこのような自在な源氏撰取を行える知識を持つていたことは、かつて『堀河百首』詠歌にあたって、題とは関係なく『源氏物語』の有名な歌や特徴的な表現を使って歌を詠んでいたことから知られる。国信は少なくとも作中の著名な場面の歌や印象的な表現を知っており、自在に引き出せる素地を有していたことを窺わせる。

四、『源中納言懷旧百首』鹿題・露題と『源氏物語』

しかし、そのような源氏撰取に関する素地を有していたとはいえ、『堀河百首』の撰取と同様、『源氏物語』の表現を諳んじて詠んだとは考えにくい事象が『懷旧百首』には現れている。

『懷旧百首』鹿題として、次の歌が詠まれている。

はかなくもうき世にめぐるつまゆへに声たかさくに鹿の鳴くかな

〔源中納言懷旧百首』鹿・44〕

これは、『源氏物語』手習巻の浮舟歌の表現を取っている。

われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやかに

〔源氏物語』手習巻〕

思いがけず生きながらえた身を厭い、小野の里で物思いにふける浮舟の厭世観の強い歌である。「うき世にめぐる」という珍しい表現が一致するため源氏撰取と知られる。

さて、本百首の鹿題に続く露題の歌は以下のようになっている。思ひいづる言の葉しげき旅寝には草の枕に露ぞしきける

〔源中納言懷旧百首』露・45〕

これは露題の題詠歌という性格を考えたとき、やや異例の歌である。露題では、萩においた露や玉のような様態を詠むことが一般的であり、旅寝の草枕が詠まれることはまずない。

結論から先に述べるならば、稿者はこれを蛸蛉巻の以下の歌の影響下に詠まれたものであると考える。

かたへは几帳のあるにすべり隠れ、あるはうち背き、押し開けたる戸の方に、紛らはしつゝみたる、頭つきどもをかしと見わたしたまひて、硯ひき寄せて、

〔女郎花みだるる野辺にまじるともつゆのあだ名をわれにかけめや

心やすくは思さで』と、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば、うちみじろきなどもせず、のどやかに、いととく、

花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはすると書きたる手、ただかたそばなれどよしづきて、おほかためやすければ、誰ならむと見たまふ。今参のほりける道に、ふたげられてとどこほりゐたるなるべしと見ゆ。弁のおもとは、「いとけさやかなる翁言、憎くはべり」とて、

〔旅寝してなほこころみよ女郎花さかりの色にうつりうつらず

さて後さだめきこえさせん」と言へば、

宿かさばひと夜は寝なんおほかたの花にうつらぬ心なりとも

とあれば、「何か、辱めさせたまふ。おほかたの野辺のさか

しらをこそ聞こえさせ」と言ふ。(蜻蛉・⑥・267〜269)

もちろんこれは「露」と「旅寝」という常識的な縁語が一致する

だけで、表面上はまったく撰取を想定すべきものではない。しか

し、先ほどの鹿題で撰取された手習巻の浮舟歌から遡って『源氏

物語』作中歌を抜粋したとき、注目されるのは、これらの歌が手

習巻の浮舟歌とごく近接する位置に見られることである。

-----蜻蛉巻-----

(略)

☆女郎花みだるる野辺にまじるともつゆのあだ名をわれに

かけめや

☆花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする

☆旅寝してなほころみよ女郎花さかりの色にうつりうつらず

宿かさばひと夜は寝なんおほかたの花にうつらぬ心なりとも

ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消

えしかげろふ

-----手習巻-----

身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけて誰かとどめし

★われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみ

やかに

撰取された歌は、蜻蛉巻と手習巻にまたがつてはいるが、このよ

うに和歌のみを抜粋してみると、間にわずか三首を挟んでいるに
すぎない。

この抜粋は、いわゆる「源氏和歌集」「源氏集」などと呼ばれ
る『源氏物語』作中歌を抜粋した本とほぼ同様の形態である。国

信は『懐旧百首』の詠歌にあたって、『源氏物語』自体ではなく、

このような「源氏和歌集」を参照したのではなかったか。鹿題を

詠むにあたって手習巻の歌を引こうとしたとき、次の露題の参考

になりそうな露を詠む歌々「女郎花……」「花といへば……」「旅寝し

て……」を目当ての歌の直前に見出し、これらの表現に影響を受け

ながら『懐旧百首』露題を詠んだ。そのために露題にしては稀な

「旅寝」の露が詠まれることとなった、という流れが想定しうる

のではないか。

蜻蛉巻の三首と手習巻の歌の間には物語上相当の紙幅があり、

巻まで違っている。『源氏物語』自体に拠ったのであれば両者を

併せて参照することは不可能だが、「源氏和歌集」のような和歌

抜書を想定することにより、『懐旧百首』の鹿題・露題の詠歌に

あたって、『源氏物語』の違う巻に存在する歌が参照された可能

性が浮かび上がってくるのである。

こうした前後の歌をも参照する態度は、先述のように『堀河百

首』参照のときにも見られたものであった。国信は『堀河百首』

を参照するとき、記憶に頼ったのではなく、基本的には書物に

よって逐一同題詠にあたっており、時として『堀河百首』では次

の題の表現も取りこんでいく。それと同じ現象が、「源氏和歌

集」の参照においても起こったと考えられる。

五、「源中納言懷旧百首」竹題・鶴題と「源氏物語」

具体的な例をもう少し見ておきたい。「懷旧百首」の竹題は、以下のように詠まれている。

呉竹のよ、とぞいと流れる別れしふしを思ひ出づれば

（『源中納言懷旧百首』竹・75）

「竹」が「流れる」という表現は当時流行したらしく、堀河院の周辺でも詠まれた。¹¹しかし、それは竹の中でも専ら「河竹」に関わり、「河」の縁語として「流れる」が導かれてきた。当該歌のように「呉竹」が「流れる」のでは縁語が成立しない。当然それは国信も理解していたはずであるから、この歌は従来の「河竹」が「流れる」歌とは根本的に違う着想から生じたと考えねばならない。

そこで浮上してくるのが、『源氏物語』竹河巻の贈答であった。「闇はあやなきを、月映えはいますこし心ことなりとさだめきこえし」などすかして、内より、

竹河のその夜のことは思ひ出づやしのぶばかりのふしは
なけれど

と言ふ。はかなきことなれど、涙ぐまるるも、げにいと浅く
はおほえぬことなりけりと、みづから思ひ知らる。

流れてのたのめむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りなき
ものあはれなる気色を人々をかしがる。（竹河・⑤・98～99）

女房が薫に竹河を謡った正月を思い出すかと問ひ、薫は時が過ぎて大君に抱いた期待も今はむなしくなり、世の憂さを知ったと返す。

竹詠では、「竹」の縁語である「よ」「ふし」が詠み込まれることが多く、表現が似通ってくるくらいはある。しかし、『懷旧百首』と『源氏物語』では「思ひ出づ」ということが共通し、その背景には『源氏物語』の過去を回想して大君を得られなかった現在を思う薫の未練と、『懷旧百首』の堀河院崩御のときを思い出し涙にくれる国信の悲痛という、往時を振り返って今を思う心情が重なりあっている。国信は竹題を詠むにあたり、この昔を恋うという心情を重ね合わせようとして竹河巻の歌にあたったと考えられる。

このような摂取を想定すると、『懷旧百首』の「流れる」はあくまで『源氏物語』に拠ったものであり、堀河院を偲んで流れる涙を表現するために取り入れられた表現であったと考えられる。縁語を成立させる「河竹」ではなく「呉竹」をあえて選んだのは、「呉（くれ）」に「くれまどふ」「くれふたがる」などの暗い情景や心情を表す「くれ」を響かせようとしたためであろうか。

さて、この竹題から一首おいた後に位置するのが鶴題である。

あしたづの羽の下にて過ぎし世を思ひいづるぞ悲しかりける

（『源中納言懷旧百首』鶴・77）

鶴は祝賀の象徴であるため、題詠としての類型化がより進みやすい歌題である。鶴題では専ら祝賀性に焦点が当てられ、千歳の長

寿や群れ遊ぶ様子、響く鳴き声、松や雪との取り合わせが詠まれる。当時ほとんどの人が鶴の実態を目にすることがなかったため、鶴題は観念的にならざるをえない。『懐旧百首』のように鶴の羽という細部の様態にまで踏み込んだ表現はまずなされないのであった。¹⁵⁾

国信が鶴の羽に言及したのは、『源氏物語』橋姫巻で八の宮親子が詠み交わした歌に着想を得ていると考えられる。

春のうららかなる日影に、池の水鳥どもの翼うちかはしつつかおのがじし囀る声などを、常ははかなきことと見たまひしかども、つがひ離れぬをうらやましくながめたまひて、君たちに御琴ども教へきこえたまふ。いとをかしげに、小さき御ほどに、とりどり掻き鳴らしたまふ物の音どもあはれにをかしく聞こゆれば、涙を浮けたまひて、

「うち棄ててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん

心づくしなりや」と目おし拭ひたまふ。(略) 姫君、御硯をやをら引き寄せて、手習のやうに書きませたまふを、「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とて紙奉りたまへば、恥ぢらひて書きたまふ。

いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

(略)「若君も書きたまへ」とあれば、いますこし幼げに、久しく書き出でたまへり。

泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守りになる
べかりける (橋姫・⑤・122～123)

宇治八の宮と幼い姫君たちが、池の水鳥を見て唱和する。姫君たちを残して妻が世を去つたことを八の宮が嘆くと、大君はこまで成長したわが身の宿世を水鳥に喩える。中君は、八の宮が「はねうち着す」、養育してくれなかったなら自分は成長しなかったのだと応じる。ただし、これは水鳥の歌であつて鶴の歌ではない。鶴題を詠もうとするとき、この唱和歌を利用することは一般的には考えにくい。

しかし、ここで先ほどの竹河巻の歌から順に『源氏物語』作中歌を抜粋していくと、この橋姫巻の唱和は、竹河の歌の直後に位置していることが判明する。

-----竹河巻-----

(略)

★竹河のその夜のことは思ひ出づやしのぶばかりのふしはなけれど

★流れてのたのめむなしき竹河に世はうきものと思ひ知りにき

-----橋姫巻-----

☆うち棄ててつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたちおくれけん

☆いかでかく巢立ちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ知る

☆泣く泣くもはねうち着する君なくはわれぞ巢守りになる

べかりける

これもまた、「源氏和歌集」の存在を想定したほうが説明がつきやすい。国信は竹題を詠むために「源氏和歌集」を用いて竹河巻を参照したとき、続く橋姫巻の水鳥の唱和が目に入った。そこに「はねうち着する君」、羽を着せて育んだ慈父の表現を見出し、近接する鶴題において、堀河院の恩寵を受けた日々を「あしたづの羽の下にて過ぎし世」と詠んだ。

このように考えると、「懐旧百首」の竹題・鶴題に見えた不自然さもまた、実は「源氏物語」を取ることに由来するものであった可能性が浮上しよう。ここでもやはり「懐旧百首」の詠歌の影に、「源氏物語」自体ではなく「源氏和歌集」参照を想定することによって初めて明らかになる繋がりも浮き彫りになってくる。

六、十二世紀初頭の「源氏和歌集」と村上源氏

以上、国信が「懐旧百首」において「源氏物語」を撰取するにあたり、「源氏物語」自体ではなく、「源氏和歌集」を用いた可能性を述べてきた。この推論が成り立つならば、それはどのような意義を持つのか。

『源氏物語』から和歌を抜書した「源氏和歌集」のような作品が生まれてくる背景には、寺本直彦氏も指摘するように、和歌における『源氏物語』撰取の高まりがあった。『源氏物語』作中歌を用いて和歌を詠むという需要があり、それを受けて、作中歌を簡便に参照するため「源氏和歌集」が生まれていく。それは、

『源氏物語』が和歌の中で権威づけられていく過程とも連動する側面がある。

このような「源氏和歌集」の存在は、十二世紀後半から確認される。後徳大寺実定の家集『林下集』には、実定が俊成に「源氏集」を借りていたこと、つまり俊成が「源氏集」を所持していたことが見える。

源氏集を皇太后宮大夫俊成卿に借りて、返しおくとて、
書きはべりし

世中の色なる水をいとへどもなを源のうちに染みぬる

返事

色をいとふ法の源たづぬれば染むる心ぞ悟りともなる¹⁷⁾

(『林下集』・364-365)
俊成が皇太后宮大夫であったのは承安二年(一一七二)二月十日から安元二年(一一七六)九月二十七日で、これが「源氏和歌集」の存在を知りうるもっとも早い例である。

現存する資料としては、冷泉家時雨亭文庫蔵「源氏和歌集」の成立が最古のようである。書写年代は鎌倉後期まで下るが、十二世紀末期から十三世紀初頭に成立した「物語二百番歌合」(藤原定家)に利用されており、これに先立って成立していたことが知られる。また、断簡には十三世紀初頭の写と見られる「伝後京極良経筆 源氏物語和歌切」やツレの冷泉家時雨亭文庫蔵「源氏集」断簡、藤原為家筆とされる「源氏物語歌集 柏木」²³⁾がある。このように、文献や資料によって現在知られる「源氏和歌集」

は、十二世紀後半以降、主として御子左家周辺に確認されてきた。現在痕跡を辿ることのできるもつとも古い「源氏和歌集」が、新古今時代の御子左家を中心に散見されることは、この時代の俊成・定家らを筆頭とした源氏撰取の隆盛と軌を一にするものであり、違和感なく受け入れられてきた。

しかし、本稿で述べてきた「懐旧百首」の「源氏和歌集」参照は、これに先立つ例として重要である。遅くとも『懐旧百首』が成立した嘉承三年（一一〇八）頃、十二世紀初頭には「源氏和歌集」が存在していたこととなり、従来知られてきた「源氏和歌集」よりも六十年ほど遡る。

そして、これを所持していたのが国信という村上源氏の一統であった。村上源氏は、平安中後期の『源氏物語』享受に多大な役割を果たした一族である。国信の祖父・源師房は、自身の歌合で和歌六人党が行った源氏撰取を称賛し、これを推進した⁽²¹⁾。また、六条斎院祿子内親王家歌合を経営し、同家歌合で初期院政期まで繰り返し行われる源氏撰取に深く関与している⁽²²⁾。その師房の子で国信の父である顕房の歌合では、源氏撰取がなかなか行われなくなった時代であるにもかかわらず、源氏撰取歌が詠まれた。このように、国信の祖父や父は、その時代の『源氏物語』享受を推進してきた人物たちであった。

さらに、師房の娘で、国信の伯母である従一位麗子は、自ら『源氏物語』書写に取り組み、その写本が子孫に伝えられることを望んだ。

源氏の物語を書きて、奥に書きつけられて侍りける
従一位麗子

はかもなき鳥の跡とはおもふともわが末々はあはれとを見よ
〔新勅撰和歌集〕・雑歌二・1199

麗子は自ら筆を執って『源氏物語』を書写するばかりか、これを「わが末々」に伝えていくよう宣言する。この麗子の態度は、池田利夫氏が指摘するように、貴顕と『源氏物語』との従来の関わり方を超越するものであった。

天皇をはじめ、皇族・大臣公卿たちが源氏物語を正面切って重視するまでには、相應の年代を要したのである。そう考えると、中宮に至った彰子や妍子が源氏物語の浄書本を手許に置き、女房に読ませるなどして聞き興じたのと、関白の室であり、右大臣の子、左大臣の妹、そして関白の母ともなった麗子が、「わがすゑすゑ」のために直接筆を持ち、物語を書写したことは、源氏物語伝播の様態の中で、画期的な違い⁽²³⁾と言つてよいであろう。

このように、村上源氏は『源氏物語』が私的な贈答を超えて歌合のような場で詠まれることを推進し、『源氏物語』の写本を子孫らが受け継ぐことを望んだ一族であった。

国信自身、『堀河百首』などにおいて『源氏物語』を撰取し、『源氏物語』をよく理解していたことは、その撰取の方法からも知られる。国信のこうした源氏撰取の在り様は、堀河朝で『源氏物語』享受が花開く以前に、既に村上源氏一族という成育環境の

中で培われたものではなかったか。『源氏物語』作中歌を参照するための「源氏和歌集」を国信が所持していたのは、こうした村上源氏の『源氏物語』への態度の一環として、まずは位置づけられよう。

七、おわりに

以上、『源中納言懷旧百首』の『堀河百首』『源氏物語』摂取を指摘し、その参照形態についての仮説を述べてきた。特に、『源氏物語』作中歌を摂取する際には、『源氏物語』自体ではなく『源氏和歌集』を用いた可能性があり、『源氏物語』享受史においても重要な意味を持つ。

国信の見た「源氏和歌集」はどのようなものであったのか。冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集』は、和歌に加え、詠歌状況を説明する詞書と詠者が附されている。寺本氏は「源氏和歌集」のようなものは通常詞書的な文を伴うと指摘する。小松氏は、「伝後京極良経筆 源氏物語和歌切」のように和歌のみを抜粋したものも、詞書を伴うものと同様、最初期から存在したとする。本百首からそれを復元するのは困難だが、摂取する場面を決めてから『源氏物語』にあたる国信の態度から見ると、その場面であることを示す詞書のようなものを有する形態であったのではないかと推察される。従来、堀河院の治世は『源氏物語』享受の黎明期と捉えられてきた。その原動力として、寺本氏は堀河院の『源氏物語』愛好を挙げられるが、それに加え、師房以来村上源氏の一族の中で脈々

と培われてきた『源氏物語』を尊重する態度にもその一因を求められよう。村上源氏の『源氏物語』尊重が国信に至って堀河院の『源氏物語』愛好と結びつき、この時代に花開いたのではないかと堀河朝になつて『源氏物語』享受が広く行われた背景に、堀河院という横糸だけではなく、縦糸として村上源氏のような文芸に長けて時代時代の歌壇を領導する、かつ権力の中枢にある一族が『源氏物語』を尊重してきた歴史を念頭におき、これらが相まって『源氏物語』享受が隆盛していく様を想定する必要がある。その縦糸と横糸の交錯する一つの現象が、国信の盛んな『源氏物語』摂取であり、「源氏和歌集」の所持であった。後に俊成が「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」と発言するに至る『源氏物語』への姿勢は、村上源氏の『源氏物語』尊重の中に既に胚胎していた。

注

- (1) 浅田徹「失われた「昔」を求めて——源国信『源中納言懷旧百首』——」(浅田徹『百首歌 祈りと象徴』臨川書店 平成11年)。
以降、浅田氏の説はこれによる。
- (2) 中村成里「冷泉家本『源中納言懷旧百首』翻刻と校異」(『研究と資料』50号 平成15年12月)
- (3) 『新勅撰和歌集』雑歌三に本百首から三首が入集し、詞書に「嘉承(1106-1108)のころほひ、明け暮れ思ひ嘆きて詠み侍りける歌の中に 権中納言国信」とある旨、橋本不美男氏が報告された。これによつて作者が確定され、橋本氏は成立年を「諒間寛つて新

帝も除服された嘉承三年七月二十五日を前後して、旧帝を思ふよすがも失はれる改元の八月三日より前、旬日の間」と推定される(橋本不美男「堀河院歌壇の終焉」(橋本不美男「院政期の歌壇史研究」武蔵野書院 昭和41年) / 初出「書陵部紀要」12号(昭和35年10月)。浅田徹氏も、一周忌の頃の成立とされる。

(4) 橋本氏前掲書(注3)

(5) 阪口和子「源中納言懷旧百首・同家歌合」解題(『冷泉家時雨亭叢書 第四十九卷 歌合集 百首歌集』朝日新聞社 平成14年)、中村氏前掲論文(注2)。なお、『源中納言懷旧百首』の本文は、冷泉家時雨亭文庫本の翻刻である中村氏前掲論文による。ただし、冷泉家本は片仮名本であるが、本稿ではこれを平仮名に改め、適宜漢字をあて、用字を改めた。なお、明らかな誤りと思われる本文に対して異本注記が附されている箇所については、注記を採用した。

(6) 「僕範草之」について、書陵部本は「僕以記藤之宮」とし、「僧以観草之歟」の傍記を附す。

(7) 宮内庁書陵部本では、「□□ふ」と空白になっており、「には」歟」と傍記がある。

(8) 「新編国歌大観」(日本文学web図書館版)。以下も勅撰集・私撰集の引用はこれによる。なお、私に濁点などを附し、用字を改めた箇所がある。

(9) 「御花」を宮内庁書陵部本により改めた。

(10) 「新編日本古典文学全集 源氏物語」(小学館 平成6~10年)

(11) 「□ヤヒト」を宮内庁書陵部本により改めた。

(12) 死去に際した哀傷だけでなく、亡くなった人を後に回想して悼む歌も哀傷歌に含める。

(13) 「和歌文学大系 堀河院百首和歌」(明治書院 平成14年)の注によると、「深山辺のしぐれてわたる数ごとにかごとがましき玉

がしはかな」(『堀河百首』時雨・899)には、『源氏物語』幻巻「つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな」が引かれている。文脈上の必然性はなく、特徴的な表現を取り入れることを優先した撰取である。

(14) 堀河天皇周辺では、以下の歌が詠まれている。

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへる事を詠ませ給へる 堀河院御製

千代ふれどおもがはりせぬ河竹は流れてのよのためしなりけり

(『金葉和歌集』二度本・賀・305)

堀河院にうち渡らせおはしまして和歌ありしに、竹不改色題

すめらぎの流れもたえず河竹のみどりの色もいろづくまでに

(『六条修理大夫集』107)

(15) 『源氏物語』須磨巻で、須磨まで訪れた宰相中将と詠み交わす歌に鶴の羽への言及があるが、これは実際に飛んでいた雁を鶴に見立てたものであり、その「つばさ」も雁のものであるため注意が必要である。

雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身そたづがなき雲居にひとりねをぞ泣くつばさ並べし友を恋ひつつ

(須磨・②・216)

(16) 寺本直彦「源氏物語受容史論考 続編」(風間書房 昭和59年)

(17) 「新編私家集大成」(日本文学web図書館版)。なお、私に漢字をあて、濁点などを附した。

(18) 寺本氏前掲書(注16)

(19) 岩坪健「冷泉家時雨亭文庫蔵『源氏和歌集』」(岩坪健「源氏物語の享受 注釈・梗概・絵画・華道」和泉書院 平成25年)

(20) 竹本元規・久曾神昇「定家自筆本物語二百番歌合と研究」(未刊国文資料刊行会 昭和30年)、樋口芳麻呂「物語二百番歌合」

- (樋口芳麻呂『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房 昭和57年)、伊井春樹『物語二百首歌合』の本文——定家所持本『源氏物語』の性格——(伊井春樹『源氏物語論とその研究世界』風間書房 平成14年) / 初出「物語二百首歌合の本文——定家所持本源氏物語の性格——」(『語文(大阪大学)』第48号 昭和62年2月)
- (21) 小松茂美『古筆学大成 第二十三卷』(講談社 平成4年)
- (22) 『冷泉家時雨亭叢書 第八十四卷 古筆切拾遺(二)』(朝日新聞社 平成21年)の「源氏集」解題(田中登氏)において両者がツレであると認定されている。
- (23) 『天理図書館善本叢書 和書之部 第五十八卷 和歌物語古註続集』(八木書店 昭和57年)の「源氏古鏡」解題(片桐洋一氏)で紹介されている。
- (24) 拙稿「歌合における『源氏物語』撰取歌——源頼実と師房歌合をめぐって——」(『中古文学』第96号 平成27年12月)
- (25) 拙稿「褌子内親王家歌合と『源氏物語』撰取——源師房の関与をめぐって——」(『日本文学』第65巻第9号 平成28年9月)
- (26) 池田利夫「源氏物語書写の黎明」(池田利夫『源氏物語回廊』笠間書院 平成21年)
- (27) 寺本氏前掲書(注16)
- (付記) 本稿は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費/課題番号1740130)の成果の一部である。

(かわらい・ゆうこ) 日本学術振興会特別研究員